独占の性格
——現代資本制経済の歴史的展望を求めて——

見野貞夫

〈目　次〉

はじめに
1　独占の組織
A　独占の面相と内基
イ　独占の兆候
ロ　独占の本因としての同類位階
i　資本の位階
ii　労働の位階
ハ　位階の再生産的帰結としての私物化
i　異種の癒着
ii　もう一つの私物化——山分けの対物関係
B　独占関係とレーニンの見解
イ　位階について
ロ　位階の対物現象としての私物化について
C　独占による社会の風化（以上『山口経済学雑誌』第34巻1・2号）

2　独占の位階——不発の共有
A　自由競争の異父兄弟としての共有と独占
イ　両者の重層構造——レーニンにしぼって
ロ　計画性と商品関係についての三つの見解——ソビエト文献をめぐって

i　第1の見解

ii　第2の見解

a　共有と商品関係の接合

b　共有と商品関係の両立

c　粗劣な経験主義論の批判

iii　第3の見解（以上『山口経済学雑誌』第35巻第1・2号）

B　独占の再生産

イ　独占による種と類の逆転

ロ　単位の破産——敗戦国

ハ　位階の前提条件

i　破産不解体の二形態

ii　下位単位（下請）の一類型としての東側

iii　位階の国際秩序——東西関係

C　独占による蓄積機構の変質——集積と集中の奇形化（以上本号）

B　独占の再生産

イ　独占による種と類の逆転

前述のように，同類の位階—異種の癒着—位階主による私物化という各局面の変質は，同一論理に貫ぬかれた一連の事情である。事象の山分け，対物関係の私物化としての事情をみても，また類が種を私物化する位階としてみても，ともに差支えなく，いずれも正しい。そして，同一論理の発現というのは，このいずれでもある。

同類の位階は，もとより直接的に，そのままであらわれるが，異種の癒着も，すでに指摘ずみのように，同類位階の変形である。労使といった基本的に正常な階級反目を抑え，これを副次に化して，むしろ事業内の有機的な一単位がまとまり，同じような組成をもったもう一つの単位に対決し体当りする場合，階級的反目以上に同類の雌雄決着を優先づけたり，社会的分業を企

業内分業でもって切断してのっとった風化の行為がたちあらのわれるが，この転倒こそは癒着である。癒着それ自体は位階の現象形態だが，いま一つの現象形態として，つまり上下優劣の決定づけと決定づけられた資格に相応して，対象を山分けする私物化として，あらためてあらわれる。

われわれは，独占を，各種内に2類分化を包有する4類2種の生物，または4層2階の構築物に喩えて述べてきた。これは，異種が同類を，種が類を包みこむ正常な作動枠組，正常な通常の組成に注目して，これを物指しにした整理であった。それは何分にも抽象的である。けだし，独占の現実的姿態は，類が種を，同等の反目が階級の対立をうちぬいて下剋上し，両者が合体した事件である，いってみれば小が大を喰い，緯が経を併呑する不合理な怪物がほかならず独占の姿だからである。それぞれの階級に二つの反目した同業間細目があるのではなく，反対に，上下位階に配列をこうむって同業の細目に2階級が宿る。種の中に類が包まれるのではなく，反対に，類が種を包むのである。したがって，独占を胎動から出現に至るまで視角におさめて正常な元の用語でいうと，実際には，4層2階というよりも，「2層4階」が独占の実相である。しかし，噴出したマグマが地殻になるように，階を突破した層は新しい「階」になるために，あらためて4層2階と呼ぶにすぎない。独占の上下主従の各自に，労資の階級対立は介在しているのである。

いま，こうした構成をもった独占組織が相互に私闘を反復してもたらす結果はといえば，運よくも勝（買）った組織はそのまま2層4階を保持するが，売(ま)け（敗れ）たもう一つの組織では，基本枠組，大枠としての上下2層が重なって一層化するなり，上位が下位に沈没するなりして合体するが，階層が階級を私物化していく上，この合体は，労資の一体化，または従業員の単色支配としてあらわれる。敗戦国，そして破産企業では，君主制から共和制へさらに労働政権の体制への移行など，国制の重大な変更があったり，また財閥解体など，独占組織の直接的な払拭・除去がおこなわれたり，独占の免許状ともいうべき寡占市場の圏域とか販域を他企業に手渡したりもするのだ。いずれにせよ，上層の下層への解消なり沈没こそ，負けた国，倒産した企業

の疲幣し果てた直接的な姿だが，そこには，下請一色の様相がある。

ロ　単位の破産——敗戦国

逆転した秩序と変質した経済関係として各自の内蔵する独占組織がなおも相互に容赦せず激しく死闘するはずだし，死闘せざるをえない現実の資本関係つまり寡占状態の条件下では，倒産なり敗北は避けようにも避けられず，どうしても付随する。作法にはいろいろとあるけれども，ともかく「弱い一環」ぶりを曝け出す企業，資本，国家などの出現は，何分にも，防ぎようがない。独占を問題とする以上，敗北した単位，帝国主義戦争に敗れた諸国，独占的集中から破産を強いられた企業の存在と帰趨にも，科学は無関心ではおれず，むしろ看過できない独占関係の構成部分とみる。これは，独占行為による被害の結末という点からだけいうのではない。それよりもずっと大切なのは，独占を再生産する培養因としての，内基としての同類位階，さらに位階の下請がたえず供給され再生産される不断のプール源がほかならず，こうした破産単位にあり，これ以外には，噴源因は求められないという点である。独占の内基，再生産の培養因という質性において，独占体をも含めた単位の破産と破産の帰趨は，独占理論にとっても，研究の一環として，どうしても素通りできず，だからそれなくしては済ますわけにはゆかない大切な論域でもある。破産単位の定在形態の一つとして，従属化に傾斜して，これをふかめる方向ともども，自主独立を本質とした非従属の労働者支配の経営単位，大きくは東側諸国といったもう一つの方向もある。破産，不破産の両企業，東西両陣営のいずれも，独占の論域構図にとって，これを欠いてはけっして十分になりえない有機的な一部分である。これは客体としての現実の独占関係にのみ妥当するばかりではなくて，この観念的模写，独占理論にとっても，そのまま有効である。東側諸国と「社会主義経済論」は，独占の系として，理論のみならず，実際上の歴史行為において，肝心な意味，大きな比重をもつことになるだろう。

それにしても，独占組織の間に闘われる集中戦，「独占的競争」は，それ

が内部に抱える位階の分肢数と層のふかさに正比した私物化をめぐる激闘であり，社会の山分け，「世界の分割」の死闘である。敗北単位を出してまで遂行される独占体による闘争が一体何を求めておこなわれるのかは，私物化の拡大のためであり，市場圏の増大を追ってである。独占的集中，帝国主義戦争も，私物化の一発現，一つの現実的な定在形態である。位階が癒着になり，これに支えられて私物化までたどりつくように，支配と強制の独占の本質は，カウツキー主義に体化される労資の癒着を通して，自然発生的に委ねて放置したならば，世界を山分けする帝国主義戦争にも，必然的に転じてしまうのだと教え説いたのが，まさにレーニンの『帝国主義論』である。その通りである。だがしかし，自然発生的には必然的にして不可避な戦争において，不運にも敗れた諸国は一体どうなるか，少なくとも，独占にとって，私有の突破にとって，ともかく現代の歴史課題にとって，こうした敗北国の定在がそもそも何をどのように意味するのかについては，同じレーニンは，どちらかといえば，文献でよりも，ロシア革命とその後につづくかれの行動であらためて答えてみせた。新しい問題，このせいもあってか，たしかに，論述不足であり，必ずしも説得的でない。独占を研究するにあたって，一見は，無縁なように思えるどころか反独占にもみえる東側諸国並びにこれに関する経済理論を，論者は，独占には不可欠な破産単位の不解体形態並びに論理として位置づけ，これに大きな比重を付与せねばならないのではないか。

私物化をめぐって，この闘いに敗れたとはいっても，独占体が具有していた位階と癒着は，自然発生的に旧体制を継承するにとどまって，何らかの作法で反独占の方向に再組織を図らないとき，不可避に，労働支配下の被害者，東側に依然在りうるが，これは一体どうなるのか，残るのはいかなる形態でか，また反独占的にふるまう場合，この後遺症の消え方はどういうものだろうか，消す歴史行為が世界の共有事業といかに連動するか……など，こうした大切な論点を含む独占理論は，それ自体として，当然に求められるし，まさにアップ・トゥ・デートな現代史の社会的歴史行為にもかかわっている。公害論を含む独占理論とともに，「社会主義経済学」を，そしてソ連経済論

を，一見は奇異だが，並行的にわれわれの研究している理由も，真実には，まさにここにある。これについては項を改めて，後にふれる。

ハ　位階の前提条件

i　破産不解体の二形態

資本の集中によって巨塊になった行動力としての資本単位，しかも同類内に位階を形成して，自己を組織の位階主または独占体として整備した単位は，同じような単位にたいして，あるいは激しく競合して対決し，あるいは協定を結んで抗争の冗費を節減するが，いかに格闘を消し対決の緩和を図ろうとも，ともかくライバリティとしての単位組織間の熾烈な排他を，行動の社会的足跡としてつねに残すものである。たしかに，巨大に組織づけられた単位は，自由競争の年代にあって単位をとらえたうらも表もない，かつての廉直な気風のまま真摯に競争しようものならば，相互に自己磨損による度合も大きいために，また協調して競争をゆるめるほうが双方にとって疑いもなく安易に利益になり手っとり早いだけに，流れに流されて自然発生的にはえてして，社会には舌を出し，歴史を喰い，民衆を舐め，社会を犠牲にして，自分の支配期間だけを延命し易い。だが，そうだからといって，この事情は，自然発生的にはそうなるという話にすぎず，だから，いつも，そして皆が皆，一律にこうなるというわけではない。同じく，自然発生的ながら，結合をばねに流れに抵抗するもう一つの方向も確実にある。とりわけ，独占体（および組織）が新興勢力にして，市場圏の縄ばりが完了しもうすでに分配済みの条件下では，秩序に無神経にして，礼儀に不敏な成り上りの単位，新興国は，既得権を欠くために，これを求めて，なりふりかまわない氏素姓ぶりをあらわして，自由競争に特有な原則にもけっして劣らない激烈さをもって，他の独占体に挑戦し，みえと意地も手伝って，全力を，法外にも，この死闘に投入するものである。こうした事実もあった。第1次大戦のドイツによる独占既得圏への暴力的参入，ドイツを含めた枢軸側より始動した先進列強にたいする再度のなぐりこみとしての第2次大戦は，この雄弁な史例の一角たるを

失わないだろう。

労資の双方を各自2層にインフレートした位階の，私物化の，寡占的に独り占めの単位つまり独占資本が自己の滅亡を堵しても相互に渉り合い殺傷を交わし，他を潰すことで自分の活き残りを図かる行為こそほかならず独占的集中，帝国主義戦争である。集中，戦争には，性質上，喰うか喰われるかの勝負，成敗が必ず付きまとい，当事者はこれから免がれ難い。こうしてみると，敗北した単位，敗戦諸国なり破産した企業なりは，4層2階の独占的結構を抱えたまま貧相にも倒壊した無ざまな姿である。敗れたり破産するするのは，所詮，生産力を含む単位に固有な支配力が低く，戦力，市場競争力が低水準にして弱いからである。独占体組織内に自分が占める択一的な上下ポストを決める格闘，奴隷単位の入手をめぐる私物化の戦争をそれぞれ担っている列強を結びつけた資本の連鎖からいえば，敗北単位は，「弱い一環」を形成して，これに参加したのである。

敗れた列強，この濃縮事象としては破産した下層資本，弱い独占体では，位階主として組織内に君臨したかつての上位資本は消えないまま，労働と一体となるか，これに沈没してのめりこむかして，並の資本に転落する。独占下の，並とは，もちろん普通の意でなく，性質上，下位の資本，下請資本の全称である。資本の運動にひきずられて，まったく迷惑な話であるが，労働の配置においても，相似形にも，上位労働者の位置を下層労働者が兼有する。まさに独り占めである。4層2階は，2層2階，本来の2階，つまり梁を共通に分有した長屋の2階建てから1階に転落して折り重なる。ここから発足した一つの方向が，(買)った資本に服して下請に転化する場合の事件である。破産を免がれた有力な単位，独占資本に買（勝)って貰って，下請に甘じてまでも従来の資本として生きるために，負けて身売りする方向，これは破産の身のふり方の一つとして，破産の不解体が内部に示すまたも細目の一変型であるにすぎない。すでに述べたように，何らかの形態をとって，破産の不解体が残留する行為は，独占の前提条件であるともに，同時に，結末なのである。この場合，破産した単位が下請單位に仲間いりして付け加わり，それ

だけ成員も増え，下請の重層をぶ厚くゆたかにすることによって，独占は，以前にもまして，いっそう強まる。ただし，独占の運動過程を支える独占の戦力，位階の膨張剤（インフレーター）としての下敷層が劣化するか，それとも向上するか，これは，それぞれに具体的なときどきの条件によって定まるが，この水準の上下高低は，下請の性格または独占の再生産作法を，いささかも変更しはしない。こうした内部事情はどうあろうとも，破産は，休止することなく，独占の産業予備軍を生産し，この中から独占維持の培養因を分泌して供給しつづける。

だがしかし，下請化による破産単位の不解体が独占に特有ならば，同じ破産単位の不解体を母胎にして，破産のもう一つの身のふり方，もう一つの不解体の作法も，当然ながら，考えられるし実際に存在する。それは，下請に甘んぜず同類の主従関係といった屈服を拒む方向であり，従業員支配の破産企業，敗戦列強に生まれた労働権力の資本制経済である。下請を拒むことにおいて，これは，破産単位不解体のもう一つの形態として，主張できるが，それなりの歴史任務をおびえてあらわれる独自な社会体制である。しかし，この方向においても，政権，経営権のふるまいなり行使の仕方次第では，任務から免がれて下請になったり，また下請の上に座わる元請にすらなったりする。これは，労働私有制の細目，社会主義経済の主要なテーマとなるために，ここでは割愛して，これ以上は，立ちいらないことにする。

そもそも，敗北，破産とは加害者による経済的な殺傷事件だから，敗者が下請となっては，被害者として，加害者，元請に抵抗して，自己を再組織できるはずもなく，反独占的に行動することもおよそ望みえないけれども，もう一つの労働私有制，従業員経営の私企業組織は，下僕化を拒んでいることもあって，独占下に反独占的組織として，自分を再組織して，加害者にたいしてしっぺ返しを加えることも十分に可能であるし，歴史前進のためには，不発に化して迂回に没している現状を再燃させたり，大道に戻したりすることを是非とも，必要な事項として遂行しうる。可能性の現実化は入手した権力の使い方次第にもっぱら依存する。独占が制覇を誇る真只中に在って，独

占をつぶす行為を，内外にわたって自覚的に再組織することは，独占がそのために回避して自己の徒労な延命を図っているところの，資本の共滅なり私有の全滅を促進する行為，したがって共有を確立する事業である。私有の細胞の中に共有の細胞を一点として植えつける，こうした不敵にもしたたかな世界の共同事業を，労働私有制は，可能性ともども遂行すべき必要事として具有して歴史にはあらわれてきた。この事業は，歴史の論理に応じて，独占下の人びとの解放には必要不可欠なだけに，並の権力ではとうてい果しえない至難の課題である。至難だからこそ，これを支援するために，妥協を知らない資質をもった労働権力，権力という支配と排他一般を普遍的にほうむるためきびしくも非妥協の支配と排撃の遂行を不退転にひきうけたプロレタリア権力，これが歴史によって賦与されている。権力を，行使の方向とともに，歴史は与えたのである。

独占内の反独占組織とは，私有内の共有事業だが，これを一国にかぎっていうと，骨の髄まで反独占の性格で貫ぬかれた，被害因だけに加害者の独占とは何分にも死んでも闘う不撓不屈の決意を内蔵していて，労働権力の下に，良質の安価を組織的に目ざした，この新型競争の資本制経済を強力に組織し，点を線に，線を面に，面を全面に拡散して普及する行為である。これは，レーニン治下のわずか数年足らずの間，革命後の新生ロシアに政策づけられて展開されたにすぎない。名づけてネップ（НЭП）経済である。だが，レーニン死後，間もなく，このしたたかな事業は終りを告げてしまった。否，指導者によって，この路線は放棄されて，終らせられたといったほうがあるいは適切であろう。

流れに流される自然発生の過程にリードを許して委ねられるところには，独占の支配下に，かつての自由競争に復帰するかのような外観を呈する反独占の組織事業はまったく望めない。それは，生産の社会化に関連した単位の集中とか共有生産財とかを破壊し，再び自由競争の孤立分散型多数単位に転化したり，単能生産財に復帰すべしというものでもないけれども，集中をとげて巨塊化した単位の間を制する行動律として，競争を弱めず，支配主の自

己磨損を最大限に強めて，歴史の前進を方向づける。これこそ労働政権にとって，果たしうるしまた果たさねばならない課題である。私有の習性をさかなでし，あえて方法自覚的にこれを遂行しきるためにこそ，労働権力を歴史は与えたのであり，この課題を果たすのが東側諸国の歴史にたいする社会的責務である。資本内の同類位階によって共有の不発を買いとっている独占関係を，資本単位間の平等性とこれから由来する競争をもってさかなでして，ひいては不発を勃発に転化し共有を招こうと組織するのだが，このためには，集中による単位の巨塊化を促進するとともに，これが独占の物質的基礎になる自然発生的な性格ぶりを封じて，単位間の平等性を維持し組織しきる意志と能力を体した労働権力が何としても必要不可欠である。私有下に私有をほうむり共有へとつなぐ自己消去を方法的に果たす権力と，これが包む資本制経済はここに欠かせない。この経済関係を保障するのが労働の権力である。権力によるこの保障を欠いた社会条件，帝国主義に反対する運動がすべてだという一国の歴史条件の下では，レーニンがいうように，「独占的資本主義から非独占的資本主義へひきもどしてはならないし，ひきもどすなどはおよそ不可能である。それはせいぜい，改良主義的なごまかしだろう。」「……独占は**すでに**生まれている——ほかならぬ自由競争の**なかから**！もし，現在では独占が発展をおくらせはじめているとしても，そのことはやはり自由競争を肯定する論拠にはならない。自由競争は，それが独占をうみだしたあとでは，もはや不可能になっているのである」(前掲書，163頁)。

たしかに，西側の条件の下では，この通りである。だが，東側諸国，労働権力を有して近代化を図り，古い遺制とは非妥協に結びつかないし，結びつきを自覚的に切断することを目ざす反独占に志向したこうした資本制経済を抱えた諸国では，自然発生的には不可能な事業も遂行できるし，また遂行しなければならない。遂行に役だつ挺子は労働権力のほかにはない。不可能を可能にする困難な事業に向けて，いままで支配者の知らなかった苛烈な支配力を体化して一定の任務を背負い，労働権力は歴史に定在するのである。

ii　下位単位（下請）の一類型としての東側

疑いもなく，労資の解消なり沈没には，二つの区分すべき方向が隠れている。一つは，直接の結果とし生じた可能態としての下請を現実に転化して不破産の企業に服して下請となるなり，戦勝国の従者になるなりする，いってみれば「依らば大樹の陰」を求める方向と，もう一つは，下請には甘せず，自主独立を貫いて，「渇しても盗泉の水を飲まず」という方向である。メルクマルとして，労働者が主人となった従業員経営体制，労働権力の組織する経済を考えてよい。破産単位の下請形態と労働者支配の形態，あるいは下請の現実形態と回避の自主形態，下請の顕在形態と潜在形態，以上，二つは，ともに例の独占的構図において，上位が下位に没入する点では，同じである。上位資本の下位への沈没と解消というかぎりでは，両者はともに同じ下請形態だが，なお，他面，労働にたいする資本の沈没いかんにしたがって，両者は区別される。上下各位が抱えている労資の在り方による相異に，その性格はそのまま鮮明にあらわれる。すなわち，下請の現実態は，ともかく労資の二人格が分立して鮮明であり，上層資本が下層資本に，独占資本が並の資本(凡俗の平均資本)に転落するのにたいして，労資の二人格が重なり合体する労働支配の経営が，もう一つの，下請の潜在形態，自主独立の形態である。

前者では，独占資本の平均資本への転落は，もとのもくあみ，復帰でなく，後退である。けだし，この場合，平均とは下請の別称であり，並とは下僕のまたの名だからである。ここでは上層資本は消えるが，下請の現実態として，労資人格の分化と機能区分は健在である。破産による傷のふか手は位階の解体と分化になるが，労資にまでは及ばない。下請として，「資本主義」は守る。これにたいして，後者では，それ自体が下請だが，屈折した自主独立の形態として，たんに資本の上層部が下層に沈没するだけではなく，独占は二人格体を抱えて労働に没入する。上下が折り重なって一つになるばかりか，それが抱えていた労資の二階も一階に合体する。まさに，二つ折りにたたみこまれる。経と緯，上下と左右，こうして二重にたたみこまれるのは東側の特徴的体質である。そこに資本が滅亡するようにみえるが，けっしてそうで

はない。下請を生産する独占的集中，集中による破産の出現は，私有の，独占の補強・固化でこそあっても，その損傷，弱体化ではないし，まして消失ではけっしてないからである。

独占の条件下では，機構の再生産過程における系列ごとに位階の集中・整備，並びに補充は，破産した企業から由来する従業員支配の企業を成立づけ，この組織を実証するのだが，相似形的に，大きくは，列強による世界の山分け(分割)行為としての帝国主義戦争は，この運動の行きつくところ，一角に労働権力下に労資の一体となった資本制経済を，事件の一所産として，さしづめ直接に産み落す。これが同類位階の露出した異種の癒着形態である。

下請は避け実現化せずに済んだ破産の自主形態，従業員組合の経営する企業も，労働権力下の資本制経済も，これが反独占の方向に徹底して自己の再組織を図らない以上，間接的にしろ，私有の保守には役だつのはもとよりのこと，独占に貢献さえし，みずからも間もなくそうした独占用の組織に転化することは十分にありうるし，実際上，そうなっている。

独占が加害を与えてもたらした経済的後遺症としての破産を解体せずに，むしろ何らかの作法において，これを残留して保守する行為がある以上，それは，直接的に濃厚にか，迂遠にして微弱にか，いずれを問わず，すべて独占主という加害者に，ひいては独占行為に力を貸す結果になる。独占にしっぺ返しを与える挺子として，本来，歴史が供して与えた労働権力を，背信的に，こともあろうに，独占を，間接にせよ，支援するのに使うのは，歴史の論理に反逆しており，もう背理以外の何ものでもない。

「どちらの親分にも反対」だという堅気衆も，やくざによる被害の体験者同志である。心底からもうこりごりだという民衆も，非同盟中立国も，労働私有諸国も，やくざ体制との闘いにおいて，反独占に自己を染め上げるのでないかぎり，事大主義に惰して，なお市民泣かせの渡世組織に，不本意にも，力を貸すはめになること必定である。従業員の経営権なり労働権力を具備した企業・国家の誕生する事件，資本家が逃亡して従業員が経営を継承した企業また労働者階級が資本にたいして局部的に下剋上する諸国の出現事件，こ

れは，私有とくに独占のボイラーを破損から救済するために，内部の気力をぬく細穴に似て，加害者，独占主がひきおこして，自己救済用に弱い分域におしつけてきた犠牲，被害である。

だが，端的には，自由競争の完全な貫徹による資本の共滅，私有の全壊を，ボイラー自体を破壊してしまいかねないほどに，体内にはちきり充満した高圧の内気力を，外体に開けた小さな穴から部分的に逃がし，圧力を下げ破損を避ける出来事に類して，独占的集中の進行，帝国主義戦争の遂行過程において，倒産した弱い企業，「弱い一環」として敗れた諸国の一つ，労働私有制は，さしずめ独占を救済して強め延命を図かるための人身ご供，本体を危険から逃がすために切りすてられたとかげの尻尾である。これは，入手できた権力をどう使うかによって性質を変えうるとはいえ，それ自体では，社会主義の拡大と普及どころか，さしあたり独占健在の証明，いっそう正確には，独占がお荷物を軽くし，自己の再新を図かり，健全になり，それだけ，いっそう強力になったことを意味する。独占にとっての不用物，妨害因を投棄し，独占組織の健康増進を図るための行動が，もう一つの側面としてもたらした副作用ともいうべき社会的被害——これが東側諸国の出生記的秘密である。独占による加害が与える負性格の歴史事件を，われわれはここに看過してはなるまいと思う。だからこそ，東側を，西側に具象化された独占による加害物件として，ここに位置づけ，しかもそこに破産の不解体が採用してみせる身のふり方の一つとして，これが支える加害者独占の健在ぶりに，不発形態として定在する共有の消極的性格，実在する共有だが，不発に終って歪められている性格を，われわれはみてとらないわけにはゆかないのである。

iii　位階の国際秩序——東西関係

関係内私物化と評してもよかった，単位による単位の主従めいた在り方は，同類の位階並びに異種の癒着という二つの姿において，私物化の闘われる対物関係にそのままおどり出てくる。この場合，闘う主体となる単位は熾烈な格闘の結果として，上下いずれかのポストに座って，白黒勝負をつけた択一的な位階単位であり，闘われる戦争も，上になるか下になるかを決定する激

戦である。位階はすでに，同類から異種に，そして社会並びにこれを含めた物象にも広く及んで貫流し，それなりに一貫した性格の一色でもって染めぬかれている。労資一体となった企業なり諸国が他企業なり他国と交わす私闘は，この結果，元請と下請の，弱者と強者の，などあれこれの支配関係を確立することにおいて，決着をみるだろうし，これによって社会的にも，位階を位階として完結するのである。個別の諸単位は，サイコロの出す運命の択一的な目次第によって色分けをうけるが，正のぶんどり分と負のぶんどり分は，それぞれ大小の量値と合わせて，同時に決まりもする。

敗れた諸国とか破産企業は下請に化して従属に転じた一方向では，この下位ぶりはなるほど感覚的に明瞭であるけれども，下請に甘ぜず，従国たるを拒否した労働私有制なり従業員組織の経営体では，性質上，下請ぶりは必ずしも明らかでなく，とくに時間が経過するにしたがって，この本性は風化し，先陣を切った国がまるで労働者の祖国，共有のとりでででもあるかのようにたちあらわれるし，そうとらえるのに論者もためらわなくなる。国際的には，東側，またありうるはずの従業員支配の企業が，本性上，下請性質を脱却しえない「弱い一環」に位置して，被害にうちひしがれた処遇をいまなお形づくりながら独占とかかわっている現実の様相を，人びとは看過してはならないだろう。

東側諸国は，ルーツを敗戦国に有し，がいして位階の接合にして，しかも異種の合体である，いってみればもっとも粗野未開の非分業的にして，非生産力的な体裁をかぶせられている。それは，支配については，同類位階すら求める無限に貪欲な独占という加害者による被害事件として，たしかにふさわしく適応的な姿だといってよいだろうが，こうしたみじめな下積の組成を強制されるかわりに，否，強制されることと不可分に，必然的だが，これを破砕し改造するがための武器として，労働支配，権力を使って，また使い方次第では，あるいは歴史の論理に即応して使う作法をもってするならば，ともかく表面に露出した異種の癒着をも解消し，労資一体を解体して両者をひきはなしながら，階級の正常な機能分化をほりおこして定立しうる。反独占

的志向の近代的な資本関係を組織できる労働権力，存在理由が独占最後の牙城ともいうべき，なお隠れている同類位階をも潰すことに在る労働権力——この労働権力が歴史と世界から任務を込めて与えられている。労働権力を位階の潰滅に使用しない以上，東側は，独占のみじめな被害者にとどまりつづけ，さらに有害なことに，加害者を支援する被害者として，独占を，直接または間接に支える不幸な協力者を，いっそう進んでは主役すら勤めることとになり，これによっては資本制経済を突破して共有といった人間史の先進的な体制をつくるどころか，私有を維持する下僕として行動するほかはない方向に不本意にも運命づけられてしまう。権力を何に対決してどう使うかの基本内容はすでに，大方は論述ずみのために，ここではふかくは立ちいらない。

東側に特有な労働権力を，これが生まれた母胎関係としての眼前に在る位階を粉砕するために使用しない以上，癒着一般とくに労資癒着の弱い独占組織から自分を解放しないし，そのままでは方々に，他に多く，同類の国が輩出するために，東側は，下請内の上位層として，みずからが弱い独占主に成り上らないわけにはゆかない。

下請の西側形態は，性質上，ともかく階級人格の分化が鮮明な労資関係を内蔵しているから，下請にかぎって云っても，労資の癒着は，これが一部分品として役立ちはまりこむ独占の上位組織には介在するけれども，下位内には欠くか，在るにしても一本化するほどにふかくはない。しかし，もう一つの東側形態では，労資の合体と沈没の姿をとって癒着はきわめてふかく，濃厚に影を落して徹底している。東であれ西であれ，下請である以上，異種の癒着は共通に免がれ難いけれども，この癒着を，山分けに参画できるほどに強力な資本主の甲斐性からこれを頂点にすえ，位階にまで高め，これによって組織を染めぬくのが西側形態に特徴的だといえるならば，これにたいして，「弱い一環」の宿命を背負い，山分けの事業から閉め出されることの多い東側は，位階を，上下に合体する姿をとるものの，この内部でふくらませるか，ともかく胎蔵することにおいて変化はないが，さしずめこの域を出ずに癒着どまりになっている。東の西にたいする相対的劣位を明らかにする特徴の一

角がここによみとれる。劣位は，同類位階が相対的にふかい点に帰着するが，発現としては，生産力にかぎらず，社会の品質，歴史前進の度合など全機構的な評定にも広くかかわっている。社会の綜合的力能と云おうか。東と西は，独自な下請と元請であり，国家または国家集団を双方にわりふった上下位階の国際的な現象である。もちろん，インドの知性，N．シンもいう通り，たとえば，米国はソ連の上司 (senior) である。[1] 口で両者がいかに自分を云い張ろうとも，米国を上位として，現代ロシアは，本質上，この下位に甘ずる独占の国際構図において，世界を山分けして，主要な当事者として，国際秩序を形づくっている。東西は，労資関係の世界的集約として，ここに階級的総対立の具象形態をみつけだそうとする人びとはたしかに，多いけれども，真実には，むしろ国際舞台にまでひきのばされた独占現象，世界経済にまでひきずって拡散された元請—下請の同類位階的な事件である。

東西，この代表フィギュアーとして米ソの対立は，独占の内質をなす同類位階の舞台が拡散し国際秩序にまでたどりついた上下の反目である。現代ロシアの存立それ自体は，同じく独占に特有な一連の性格，異種癒着の歴史的事例であるけれども，これと本質上は同一の位階を別に結んでこの頂点に立つ米国は，癒着自体を位階で保障づけた，いっそう発展し，いっそう強力な独占組織の同じく国際的な史例であろう。

ソ連を含めて東側諸国が，労働権力を，不退転の決意をもって，反独占の方向に行使し切らないかぎりでは，「社会主義社会」の別称を有する東側にたいして，アメリカをはじめ資本主義諸国にわれわれの求める期待と希望以上のものを託すわけにはゆかないし，ひょっとすると，それ以下のものしか望めないかも知れない。これを心得ているならば，米ソにたいして，どっちもどっちといった評価をもって，両者の日常行為に幻想を抱かずに，これを理解しうけとることができるのみならず，この歴史迷路から脱却する社会的行為の方針づけも大まかながら体得しうるだろう。

1）拙訳，反核の経済理論（『東亜経済研究』 第49巻第1・2号，1984年）。

C　独占による蓄積機構の変質——集積と集中の奇形化

資本の現実的運動として蓄積（アキュミュレーション）は，集中（セントラリゼーション）を推進の内基に蔵し，これにかぶさる集積（コンセントレーション）を面相として定在する。いうまでもなく，集積と集中は，被動の集約因と作動の分泌因との相互関係において，両者，緊密に結びついている。

集中は集積として現象する。集中は，固有には，経済単位間の相互活動であるけれども，集中をも含めて，対物関係としてあらわれるのが，もう一つ，集積である。集中はまずもって，個別の諸資本が他資本にたいして合併，併呑，吸収などの姿をとった経済的淘汰を無慈悲に執行してみせる行為であるが，これを事後的に集計した社会的な収束がほかでもなく集積である。集積は，社会的規模の蓄積として，労働者階級の搾取からのみ由来する資本の増殖現象（剰余価値を生産する価値並びに現物の手段増加）である。集中による資本の増加は，社会的には，所詮，この集積に原資を有するわけである。

集中は，個別資本に担われて実行される生産の社会化であるのみならず，この社会化の前提であり，同時に結末でもある。生産の社会化は集中を自己の実現形態たらしめる。社会化は，集中を通して，集積にも及び，集積をして，多少とも，社会を，市場を，国家をわがものにした私物化をば粉砕する傾向，可能性を与える。この極限として，私有内に拘束された社会化ならず，排他の普遍的揚棄としての他人主義的行為と，これにもとづく社会，物財，国家の再支配・消去もあらわれる。集中と集積は，この発展のきわまる極限においては，まずもって他人を無条件（没私性的）に活かすことによってのみ，自分も最大限（個性的）に生きる共有関係と，力（＝所産）を全面的に，人びとの統制の下において立たせる完全な再支配を通して，それを最大限に入手する経済の計画化，つまり極限の連帯と再支配として，二面的にあらわれるはずである。したがって，集中は私有内の共有（＝個人有）であり，同じく私有内の計画化（自由）の兆候が集積であるともいえるだろう。

生産関係が生産力として，また同類の在り方が異種の存し方として発現したように，集中が集積として現象する作法には，変化はなくとも，集中に服する単位相互の在り方が一体何であり，これがいかなる構成を為すかにした

がって，集積の存し方も決まり，そのようなものとして行くがままに生じてくる。すなわち，単位が集中によって規模を大きくし，巨塊化するにせよ，それにもかかわらず，相互の間にはりつめた平等な反目関係が介在して失われないかぎり，かれらの間の熾烈な競争を通して，まずは価値減少，価格の低落となり，この条件の下で，またこの低落を武器に，国家公人，財貨，社会をわがものたらしめる度合もおのずと決まる。生産の社会化に由来した協業による節約は，参画した単位の相互に平等な関係によって吸収されて濾過をこうむり，個別価値の多少を挺子にして，これを仲立ちとする社会的対物入手の大小としてあらわれる。集積より一口多い集中が抱えている二つのベクトル，つまり単位の共同化（生産の社会化）と，単位の平等関係（競争の平等性）は，販路の入手，そのために価格の低落としてあらわれるが，個別的には，市場占有度の追加的な大小と，低い個別的生産費にもとづく超過利潤として，二面にあらわれる。二面を具有する集中度，つまり集積でも，それは，また二面にわたってあらわれる。

生産の社会化と，これを濾過する単位間の平等関係は，物価の低落と，低落の個別的大小になり，これを武器として，これに比例した市場の大小こもごもの占有としてあらわれる。生産の社会化と市場の占有を外項にうけとめ単位の平等関係と物価下落を内項とする構造の集中—集積の組織がほかでもなく，私有内に唯一の進歩的現象としての自由競争が着用する姿であった。低落する物価下の総資本による対物的取得，個別資本の超過利潤と，これをばねとする市場の支配——これが自由競争の集中—集積の定在する作法であった。

だが，競争はいつもつづいて存在するわけではない。社会化に変わりはなくとも，単位間に位階が組まれでもしようものならば，低落する価格を対物的に取得するかわりに，低落しない価格の私物化が生じる。集中と集積はここでは社会化を濾過する単位間位階と位階主の私物化としてあらわれる。個別資本にとっては，一定の高価格の下にいくばくを自己の系列下に有するかに応じて，社会にたいする私物化の度合もおのずと異なる。単位間に位階が

介在するために，物価は高水準になって低落しないのみならず，位階のふかさにしたてがって，この主人たちによる市場の山分け（私物化）がおこなわれる。高物価も，市場の山分けと同じく私物化の一環である。けだし，公人にたいする私物化こそ高物価なり価格の恒常的騰貴にほかならないからだ。

同類の間に位階を欠いて，仮りにも，相互に平等であろうものならば，社会化が果てるところ，集中は，集積をふみこえ，私有も突破してしまうことだろう。資本の全滅を回避する，まさに延命工作として，こうした位階が，独占を独占たらしめ，私有の延命という肝要な目的を独占に達成せしめる。独占は，したがって共有の迂回形態，択一の部分である。独占の内基として，位階は，物価を下げず高水準にとどめて，ものを協調的に山分けするのを必然化し，対物関係の分域における再支配の全面化をも妨げる。だが，こうした独占の現象には，それが不発の共有だけに，高物価にせよ，物価の盲目的低落を阻止するとか，山分けにせよ，分けられた範囲で多少とも計画化をほどこすとか，こうした矮小化された奇形の再支配を，カリケーチャーばりに，独占が執行して果たす事例が介在し，それに遭遇するのである。だが，これはそれだけのことにすぎない。

いっそう正確には，単位間の上下位階は，物をめぐるかれらによる山分け事件として，獲得を左右に二分して，完全な下剋上を分断し，全面的な再支配（レボリューション）を阻止する。これによって，組織は，逆転して，上下秩序は左右の関係としてあらわれる。位階の集中は，集積に介在する私物化の折半，山分けとして現象する。

単位間の平等を前提とした集中は，本来，単位を破産せしめ，破産を社会進歩の摩擦熱に化して消去し，残る施設のみを収集行為の客体とした。これは価格を低落せしめるし，これをもって，財を，資本を，社会を，個別単位は集積した。だが，反対に，位階に立脚する集中，位階形式の集中は，それ自体，不発に終わる共有の単位間関係であるが，他面，物価と市場を貫串して，私物化を可能にするが，高物価の条件下，市場の山分けとして，変質をとげつつ，集積は現実にあらわれる。

自由競争の場合には，生産の社会化を吸収する同類の反位階ともいうべき相互の平等関係は，反私物化として，まず価格下落となり，この低価格を前提として，個別資本が自己の内部で，あれこれの低下した水準にいかに耐え，どれほど物価下落をうけいれるかといった費用支出の節減に比例して，だが，他資本との関連には無関心に，市場は，山分けする作法をとらず，直接じかにわがものにして，社会全体としての集積に前望的に実のらせ刈りとった。

これに反して，同一の社会化を，上下秩序に並んだ単位の不平等な関係で吸収する集中の独占的構図は，まず高まることはあってもめったなことでは低落しない高物価の下で，物価を高める位階のふかさに比例して，この強制力に応じて，個別的に資本が可能なかぎり，この分だけ他資本と折半して，私物化を果たし，この成果を集積として社会的に集約するよう方向づける。

独占では，集中と集積は，者内位階と対物的私化（＝私物化）の歪められいびつな姿になって，現象する。

社会的に価格下落と平均利潤として，あるいは個別資本には低下した価格と超過利潤としてあらわれたかつての事情は，独占ではまるでうって変って，低下しない価格と独占利潤として，あるいは同じく個別的には高い価格と追加の例外利潤としてあらわれる。ところが，低下しない高価格と独占利潤は，独占主による社会の私物化と費用不足（公務障害＝公害）を集約した一般名である。古きよき時代に替って，新らしい劣化の季節があらためて訪れる。

同類の平等関係を前提として組成の集中が集積をうちぬいて自己を貫徹し果てるところ，共有が生じるはずだし，生じた共有は，またしても新型の「集積」と「集中」となって，個人の共同活動が求める不可侵性（インディビジュアル）の実現としての計画化と，これを全体としてまとめた枠組としての組織条件，この二つを具有する。共有は，こうした区分のできる二つの側面から成り立っているが，これを範畴でいうと，費用と共同剰余となるが，さらに発展すると，行為運動それ自体の次元が表面化して，労働時間（アルバイツツアイト）と自由時間（フライエツアイト）となるだろう。

ところで，集中が集積をうちぬいて私有と訣別し，共有を実現してみせることが十分に可能なはずの歴史条件の下で，こうした蓄積組成から成る平等

関係を位階に変質して，この変質に支えられながら，同じく集中が集積を射ぬく場合にのみ，はじめて独占はあらわれる。そして，あらわれた独占は，系列単位内に4層2階を林立してみせるが，相互間でも，場合によっては，激闘がさけられないからして，当然，敗北した系列単位も考えられうる。敗れた系列単位は，前述のように，独自な構成をとる。こうして独占の関係は，闘争している平等な個別の系列，社会を山分けする系列組織の複数グループによりなる定在と，もう一つの，敗れた諸国の存立，合わせて三種の類型単位を有することになる。資本が全体として，労働階級を直接の前哨隊列とした作法に対応するはずの民衆によって全面的に下剋上はされずに，むしろ資本同志の間で山分けをおこなって系列化に配置づけて，迫ってくる集中，相互に平等ならばすでにとっくの昔にのりこえられてしまったであろう集中にたいして，「ここまでおいで」といったふうに，距離を開けては隔てた集積として，資本の現実的運動はあらわれる。距離を開ける内味はといえば，各階級の2層化であり，同類内の位階形成である。位階で買う私有破砕の私有内延命の証明こそ，社会の系列化として資本による資本の山分け組織であるが，系列内では，きわめてディフォルメされた形態をとって，同じく共有の実現が執拗にもまつわりついて生きつづける。共有—計画化は，系列組織内では，社会化にものをいわせて，ローカルにせよ，いろいろな方面から，生産を企画し管理して，統制を加えることも可能にする。しかし，あくまでも普遍的ではない。だから，組織外では，肩すかしを喰わせるかのように，共有ならず，むきだしの非計画化と排他関係が，わがもの顔に横行する。

同類の間にいわば平等の水平棒が貫串して，労働者階級を先頭とする民衆全体によって資本が下剋上をうけ，必然的に全滅し共有を確立していたはずの可能な状態を，資本は，上下位階によって妨害して実現せしめず，屈折を加えて私有を救出しはするが，この救出作法とは，左右に分かれた独占主が社会を山分けする奇形化した再支配である。同時に，この場合，また，敗れた独占主をもつくりだすが，それは共有不発のもう一つの事件だけに，位階で買(勝)った独占と同様に，歪められたとはいえ，共有性格を色濃くもたざ

るをえない。すなわち，集中と集積の間に，さらに集積内部の事項ともいうべき労資間に距離を開け位階づけるのに成功した不破産の資本にたいして，負(売)けた位階としての破産資本は，反対に，集積が集中に突入したり，また場合によっては，資本が労働に沈没したりして，4層2階の1階化が進み，そのようなものとして，独占のままでの倒壊状態を示している。潰れた独占といえども，そのままで加工をほどこさない以上，潰れる前からこれに特有だった4層2階がなおも生きつづける。ここで注意しなければならない点は，集積が集中に没入することによって，資本が労働に埋没するばかりではなくて，各階(級)の上位が下位にのめりこむということである。集積が集中に突入している事情，資本が労働に埋もれている現象，上位が下位に服する事件，どれ一つとってみても，民衆による民衆の下剋上が果たしきられたかのようにはみえる。これは，ちょうど支配者がみずから自力で強力であるように映えるのと同類の錯倒である。しかし，これは，結局，仮象，外観にすぎない。それは，事実的だとはいえ，所詮，錯覚，誤認以上のものではない。この仮象や錯倒から，現代経済学，とくにマルクス経済学は，口で云うほど，果たして自由だろうか？

ところで，固有な意味の下剋上ではなくして，上位が弱すぎるゆえに保護を求めて下位に没するだけの変化であるため，私有をいささかも脱することのない，そうしたローカルな事件，部分の現象が東側の存在証明である。それは下剋上からはほど遠く，このままでは西側よりもずっとおくれをとって，いまだ下剋上の前提条件をつくる前段階にとどまる。このことは，破産の系列組織そのままを継承して，被害者らしく，反加害のカラーでもって自己の再組織を図らないかぎりの話であって，それ以上のものではない。だがしかし，敗れた独占をうけとめる自然発生的な保守の方向と作法が，不幸にも，現実には，歴史の主流となった。名づけて東側であり，人びとの呼ぶ「社会主義経済」である。

東側は，ローカルに集中が集積をうちぬいた部分不均衡な社会の状態であるし，このごとき外観もとるが，正確には，世界情勢の力学から資本関係の

集積が集中にのめりこんでしまった体制だから，外面よりして位階一色づくめに染められる。各位階内に，異種としての労資が介在する。これは，西側の系列組織をまったくひっくり返したものである。しかし，この転倒した遺制を，恰好の武器として役つはずの労働政権をもって，独占不許的に加工せずに，むしろ後生大事に継承する自然発生的類型つまり単独労働私有制には，再び異種癒着と同類の癒着が生(は)えて来て，労資の各階級内に2層があらためて区分づけられる。全体は労働単色に染めぬかれて，所有資本主はといえば，国家またはこの変型機関がなるだけのことである。資本関係が賃金奴隷制である以上，「社会主義経済」は，後進資本制経済であり，一般奴隷制(アルゲネイネ・スクラベライ)ならずとも，一般賃金奴隷制(アルゲネイネ・ロンスクラベライ)であろうか。それは，共有の社会とか，この変種などではけっしてない。

共有確立の事業にとって，生産の社会化が貫徹の果てに執行される私有の突破は，当然ながら，資本最後の行為としての蓄積の進行過程においては，集中によって実現される集積の下剋上といった対社会の関係であらわれるはずだが，この関係が自己を被動として関数的に依存している集中内の作動事項，とくに資本間相互の関係と密接に結びついた労働の連帯関係に，資本に似せた亀裂がはいって，かれらが上下に分断をうけて，階級的結束が破砕される場合，この場合には，共有を招く行為は，秩序が逆転し，同じく蓄積に濃縮していえば，「弱い一環」の資本部分において集積が集中にのめりこみ，この連環として，力（支配）が行為（被圧）に突入し資本が労働に沈没して，さらには同階級内の上層が下位に埋没するといった階級と階層のいずれかにおいても，独占に特有な同階級内の上下に転倒した構造としてあらわれる。集中が集積を突破するのか，あるいは労働が資本をうち払うのか，それとも反対に，資本が労働に沈み，そして集積が集中に没するのか，この対社会的関係に，両者いずれの現象があらわれるかは，単位（資本・労働）が階級的な連帯を毅然として守るのか，それとも企業主義的な分断を許してしまうのかの，こうしたかれら相互の関係が一体どう在るかによって，ひたすら定まるのである。対物関係が者内相互関係として現象するという社会の真実な定

在論理は，いつどこでも，あらゆる局面において生きつづける。

世界の分割をめぐる帝国主義戦争，市場圏を求める熾烈な独占的集中行為において，敗北した列強，破産した独占組織は，さしずめ事後収拾の一方向として，労働者の制圧に一国が服して身を処すとき，資本が労働に屈服して，労働権力が出現するのみならず，また資本・労働の上層が各自内の下層にのめりこみ権力の中枢に下層労働者がはいりこむ、こうした労働支配のラディカリズムとしても落着するわけである。いわゆる東側であり，「社会主義経済」である。

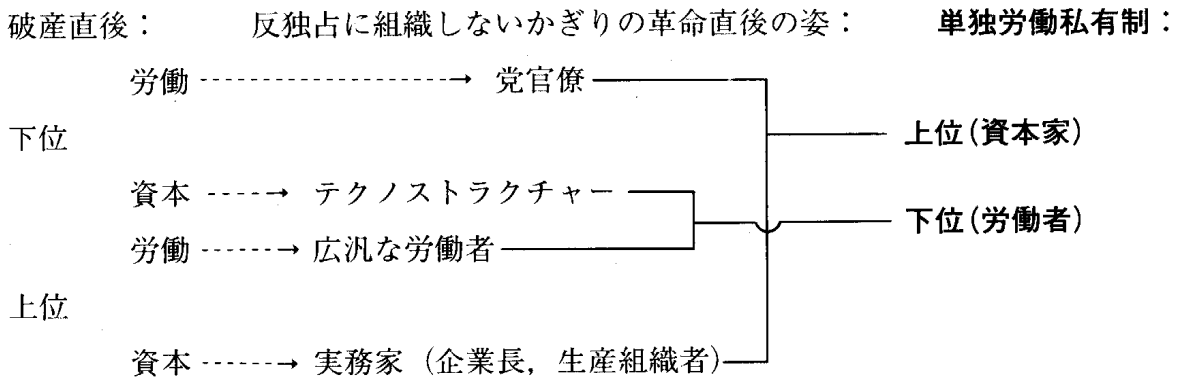
独占体または列強が内部組成にもっていた機能とポストは，前述のように，逆転して，占めた上下階位はひっくりかえり，反目する社会単位間の分業的秩序は転倒するのだが，いま全体像としてとらえ，かつての状態を基準に整理して考えるならば，ほぼ次のようなことになるだろう。

労働に資本が沈みこむのみなせらず，上位が下位に没するみかけだおしの下剋上，表象の逆転を集約して，種が類になだれけこみ階級が階層に解消する作法こそ，**西**を逆の関連で補足した**東**の特異な現実の姿である。もとより，敗れる直前なり，破産以前には，今日でも，健全な独占，強い列強がそうであるように，正常に，帝政ロシアをはじめ，こうした諸国は，階級が階層を包み，種が類をまとめて，何とか弱さを露呈せずに済ましてきた。しかしいまでは，敗者としての後遺症をひきずり，あるいは独占行為にかかわって「弱い一環」がうけた被害の結果を払拭しないまま事大主義に終始するために，異常にもなり，分業内企業による社会的分業の切断なり妨害として，階級を階層が占拠し，これにリードを許しているかぎりにおいて，そのようなものとして**東**は成立する。このことは，階層の強大ぶりがもらした結末ではなく，階級の弱さのまとめた帰結である。たとい階級と階層の一体化としてあらわれる独占に特有な同一の外見を呈し，これを共有していても，なお東西は，明確に区分づけてかかる必要がある。すなわち階層が階級を突破しかねない上向のもたらす一里標的な現象としての両者の合体傾向を，階級のうちに2層化したふくらみをつくって，何とかかわして収拾し，逃げるのが西

側だけれども，東側は，合体の隙間から，階級が階層へ沈んでいるという逆方向の事態をちらほらと覗かせ，隔絶という，もう一つの合体傾向をうつしだす鏡として役だちさえもする。階級が階層へ没した両者の一体化と階層の追い上げによる合体とは，依然として，相異なるが，相異なった方向が相互に補足し合って，東西として，世界的に連結するところに，それ自体，蓄積のとくに集中の肥大化した独占の構図と奇形ぶりをかなり鮮明にみせつける。

階層に階級が突入して再生するとき，上層にも労資の関係が，下層にもまた労資の反目がこもごもあらわれるが，この逆転した印象的叙述は，かっての状態が用語上の基準になるためであるけれども，マグマが地上に噴出して熔岩に，さらに熔岩は岩石となるように，いま古い類が新しい種になり，古い階層は新しい階級となって，装いもあらたに登場するが，このとき，成立した新型階級の労資におのおの，同じく新型の2階層が介在することになって，新型の独占機構は，定着と健在ぶりを如実に示して余りある。

このような脈絡において，資本蓄積の奇形なり異変としての独占が，連鎖の弱い部分におしつけて自分の作動する再生産の一角，構成部分として求めとりこむ関係こそ東側の姿だから，東側に独自な2階4層がありえても，それは，けっして不思議ではない。労働権力の自然発生的な継承にとどまり，この行使によって内外の現状を反独占的に再組織する任務をひきうけないかぎりでは，企図はどうあれ，客観的には，不本意ながら，もう一つの独占関係として，東側は歴史にあらわれざるをえない。



いまここで蓄積とは，たんに生産物価値の追加分による資本化にとどまらず，これに連動し体化している矛盾ぶくみの資本関係の累積，集中，集積がさしずめ問題であり，こうした意味における蓄積組織が叙述すべき論点であった。

蓄積を，対物的事象のみならず，生産関係の事象にもイスカレートしてとらえるとき，東側諸国の存在と，内部組成の性格は，資本蓄積論の，とくに資本制独占下の奇形化された特異な蓄積論の一角として位置づけられる。それは，本質上，資本関係の理論を一歩たりとも出るものではないから，これをのりこえるはずの共有の理論には，およそひっかかりようがない。**東**に共有としての「社会主義経済」の諸関係を求めてみさだめようとするのは，それこそ木に登って魚を探す類の，科学上は徒労にも，愚劣な行為であろう。そうではなく，東側を，労働政権下に，正しい行使の仕方ではじめて可能となる，反独占一色の近代的な資本関係を目ざす資本関係だと考え，またこうした組織づけだとみるならば，このアプローチはさしづめ科学に即応するし，こうした理解と歴史的行為こそかえって共有へとよじのぼる真実の保障を与えることだろう。